

安室川のチスジノリ、9年ぶりに生育確認

チスジノリ (*Thorea okadae* Yamada) は河川に生育する紅藻類こうそうの一種で、その名前は形や色が血管を流れる「血の筋」のように見えることに由来します。紅藻類といえば、私たちが食べている海苔のり (アマノリ類) のようにほとんどが海産ですが、いくつかの種類が川などの淡水域に生育します。一般的に小さい淡水の藻類のなかにあって、チスジノリは大きいものだと長さが1mをこえる大型種です。晩秋から冬にかけて生長し、春に果孢子 (植物の「タネ」にあたる) を放出して夏には姿を消します。本種は日本の固有種とされ、鹿児島県の川内川 (菱刈町) と熊本県の菊地川 (山鹿市) の生育地が国の天然記念物に指定されています。主な生育地は九州地方にありますが、他の地方でもいくつか分布が知られています。たくさんの生育がみられた地域では、昔は食べていたようです。しかし、最近では全国的に生育地や個体数が減少し、絶滅が危惧されています。

兵庫県西部の千種川水系・安室川 (上郡町) では、1991年にチスジノリの生育が確認されました。それは、県立上郡高校教諭 (当時) の田村武男氏が採集した標本を、真殿克麿氏 (現、東洋大学付属姫路高校教諭) がチスジノリと同定したことによりですが、地元住民からは30年以上前より「めずらしい藻」として知られていました。安室川ではその後3年間はたくさん見られましたが、1995年以降は出現しなくなりました。そのため、2003年3月発行の改訂・兵庫県版レッドデータブックでは「今見られない (Ex) 種」に分類されました。

その一方で、安室川を管理する兵庫県上郡土木事務所は、2002年12月より「安室川自然再生計画検討会」を組織し、かつてチスジノリが生育した河川環境を再生する取り組みの検討を行ってきました。検討会では、安室川の特徴は河道内の各所で地下から水が湧き出す点にあること、さらにチスジノリが消滅した原因の一つとして、上流部のダム建設により夏季の洪水が減少したことなどがあげられました。そんな矢先、2003年8月8日に台風による集中豪雨があり、安室川は近年ではまれな洪水に見舞われました。そして翌年1月31日、検討会がチスジノリの生育確認のための調査を実施したところ、9年ぶりにその出現が確認されたのです。

それまでチスジノリの姿がなぜ見られなかったのか、その出現に夏季の洪水がどのように関係したのか、その実態の解明はこれからの課題ですが、「めずらしい藻」の復活は安室川自然再生への取り組みの大きな励みとなったことだけは確かです。

(自然・環境評価研究部 佐藤裕司)



川底の石に着生したチスジノリ
右下は顕微鏡写真、洋梨みたいな形をした細胞 (果孢子囊) に果孢子が入っている

